平成 30 年 2 月 21 日
UDCK三牧

都市＋デザインフォーラム

日本の街なかに求める居場所とは

1. 公共空間の活用に関して　10 年前からの展開

・都市における公共空間の賑わい利用促進に関する調査（㈶都市づくりパブリックデザインセンター 2002～2004）／「公共空間の活用と賑わいまちづくり」（2007/5 学芸出版社）
・当時の問題意識：利用を厳しく制限する制度やその運用に対して、いかに「風穴」を開けるか。　（「どのような居場所が必要か」、という議論はあまりなかった。）
・その後、様々な制度面での対応がなされ（2011 都市再生特措法道路占用許可特例、2017 年都市公園法改正等）、「エリアマネジメント」の広がりとともに、利活用事例は増加。
・一方で、「使えるのに使われない公共空間」の発生。何のための公共空間か、街なかにおける「居場所」としての公共空間論への立ち戻り。

2. 柏の葉キャンパスでの「居場所づくり」

・2005 年 8 月つくばエクスプレス開通　「柏の葉キャンパス駅」を中心に 273ha の土地区画整理事業。
・近隣に立地する東京大学、千葉大学、駅周辺の土地を持っていた三井不動産、区画整理事業主体である千葉県、地元自治体である柏市が連携した「公・民・学」連携のまちづくり
・2006 年 11 月　柏の葉アーバンデザインセンター設立（初代センター長：北沢猛東大教授）
　2008 年 3 月　　まちの将来構想として「柏の葉国際キャンパスタウン構想」策定
・ＵＤＣＫを核に、まちづくりに係る従来の立場を超えた議論とプロジェクト化。狭義の都市デザインとしては、空間デザインと事業化コーディネート、マネジメント支援、担い手育成等を総合的に実施。
・４つの「居場所づくり」事例

①柏の葉キャンパス駅西口
　…気持ちいいはずの屋外テーブル・椅子はなぜそれほど使われないのか（日陰の重要性、地区全体としての人の回遊動線と滞留密度のデザインの必要性）
　…高頻度ではイベントを打てない、郊外駅前の公共空間で「稼ぐ」ことのむずかしさ

②アクアテラス（二号調整池）
　…ブロックの中心に据えられた「水辺」の求心力
　…日陰のない空間を使うために

③子どもの居場所
　…ちょっとしたきっかけで子どもは遊ぶ、パパママが集まる　郊外新市街地として確実に存在する「子どもの居場所」のデザイン

④屋台プロジェクト
　…ピカピカのつくられた街に、心落ち着く小さい居場所は計画できるか

3.「計画的立場」からの屋外空間活用 と「利用者目線」から屋外空間利用

【計画的立場】からの屋外空間活用

・なぜ計画者は屋外空間を利用させたいのか。

①魅力的な屋外空間（イキイキとした都市活動の表出）が、都市のイメージ向上につながるから
②収益利用によって稼ぐことで、維持管理費を賄えるから
③緊急的にまちに必要とされている機能の導入空間として「手ごろ」（用地取得などが不要）だから
④都市に暮らす人々のニーズに、よりよくこたえる、または潜在ニーズを呼び起こすことで、暮らしの質を高めるため

・①～③は計画的立場の考え方（利活用させることが目的化）。改めて、④の利用者目線の考え方に立ち戻る必要性がある。

【利用者目線】からの屋外空間利用

・「仕方ないからその場所を利用しているのか」、「積極的にその場所を利用しているのか」

①屋外でないとできない、受け入れられない活動　：散歩、スポーツ、子どもの遊び、犬連れでのカフェ利用
→確実に利用ニーズはある。「ただ使えればよい」から、「より魅力的で利便性の高い利用環境のデザイン」へ
②屋内でもできるが、あえて屋外で行う活動　　：オープンカフェ、屋台
→気候条件や日本人の気質として、屋外であること自体は優位でない。漫然と空間をつくったところで使われない。空間体験としてのデザインへ

・消極的利用（仕方ないからそこを使う）から、積極的利用（その場所を積極的に使う）へ
・①からのアプローチに、もっと可能性があるのでは